「地域と環境」No.17　2023.3

三国湊の景観変化と福井藩による港湾整備

The changes of the urban landscape in port town Mikuniminato and the port development in the Fukui clan

三　好　志　尚
Yukitaka MIYOSHI

三国湊は景観の変化を伴いながら中近世に発達した港町であり，本稿ではその景観変化と福井藩との関連を検討した。その結果，三国湊では近世に地形条件の変化によって港が衰退しており，福井藩は旧来の港の整備と新町の建設を行うことで港町の維持・発達を図っていたことが分かった。またこの背景には，三国湊が位置する九頭竜川河口とその後背地において藩領や幕府領が分立し，港町間の競争が生じていたことが挙げられた。

キーワード：港，都市空間，地形，景観復原
Key words：ports, urban space, topography, landscape reconstruction

Ⅰ　問題の所在

戦国期から近世初期にかけての中近世移行期は都市が大きく発展した時代であり，その中には港町も含まれている。建築史学の視点から港町景観を検討した宮本（2005abc, 2006）は，中近世移行期に管理交易から自由交易に転換したことが港町の景観に大きな変化をもたらしたことを指摘した。宮本は，中世の港町は問・座・寺社・領主などの特定の交易主体が管理する船着場から内陸への道に沿って市が開かれ町場が展開していたという特徴を見出し，これをタテ町型とした。そして近世には，一元的な公権力の下で自由な交易の安全と秩序が保証されたことにより，水際線が船着場として広く解放され，水際線に並行した道に町家が建ち並ぶヨコ町型の町場が展開するようになったとした。

以上のような宮本の成果は全国の事例を包括的に検討して理論化したものであり，港町景観の近世化に関する研究として一つの到達点であると評価される。他方で歴史地理学の視点から中近世の港町の景観研究を行った山村（2005, 2008, 2015, 2018）は，東北や北陸，東海地域の港町を事例として各港町の都市空間が地形環境や舟運・街道交通網の変化などと関連しながら展開していたことを示した。宮本が主に水際線と街路形態から景観を類型化することで港町の空間的特徴を示したのに対して，山村による一連の景観研究は，寺社や城館といった港町を構成するあらゆる要素の立地・形態・機能を復原することによって地域の文脈の中で港町景観を

捉え直す試みであると位置づけられる。つまり景観の類型化に留まらず，港町の空間構造を明らかにするためには，個別の港町に関して改めて精緻な景観復原研究を行い，事例を蓄積していくことが求められる。

そこで本稿では越前国の三国湊を事例として中近世移行期における景観の変化を検討する。三国湊は日本海に面し，大河川である九頭竜川の河口に位置する港町である。中近世の三国湊の景観に関しては，玉井（1984）が主に各町の由来の記録と街路・街区の形態から復原した。これによると三国湊では，中世の都市空間は水際線沿いに存在し，近世には新たに整然とした町並からなる都市空間が形成されていたという。宮本（2005c）は，とりわけ日本海や太平洋に臨む大河川河口部の港町は 17 世紀後半の東廻航路と西廻航路の確立に伴って成立あるいは拡張したものが多く，内陸の城下町の外港として一挙に成立した計画都市が多いため，近世初期のヨコ町型の都市空間が顕著に見られるとした。中でも新潟や酒田に代表されるような特に計画性の高い港町では，ヨコ町型の町割に加えて均等な宅地割が敷かれており，商人の自由競争の前提となるフラットな空間構造が実現していたという。そして宮本は玉井の成果を踏まえて，三国湊は中世港町を継承した都市空間を主体としながら，新潟や酒田に見られるような均質な都市空間が付加されることによって拡張した港町であると分類した。

以上のような玉井と宮本による三国湊の景観復原研究は，建築史学の視点から街路・街区・屋敷地からなる町場を精緻に復原し，その特徴を明らかにした研究として評価できる。一方で，街路・街区・屋敷地だけでなく，港町を構成するあらゆる景観要素を復原し，さらに周辺地域の在り方を踏まえて，総合的に景観の変化を検討する研究は行われていない。こうした地理学的手法で中近世移行期における三国湊の景観変化を復原することで，景観の類型的把握に留まらず，景観変化の要因まで考察できると期待される。

さて，三国湊の港としての歴史は古く，『続日本紀』の宝亀 9 年（778）9 月 2 日条の記述が初出である。また中世の三国湊は，興福寺大乗院領河口・坪江荘の年貢積出港として機能していたことが確認されており，戦国大名の朝倉氏が越前国を支配していた時代にも有力な港だったとされる（三国町史編纂委員会編 1983: 87-142）。しかし中世以前の三国湊の正確な立地は明らかになっていない。図 1 は正保 3 年（1646）作成の『越前国知行高之帳』と正保 2 年（1645）頃作成の「越前国絵図」（以降ではそれぞれ正保郷帳，正保国絵図と示す）[1] を基にして近世初期の九頭竜川周辺の村の立地を示したものである。図 1 の河口部の村々の中でも，正保期に「三国浦」と称される集落が近世に都市空間を大きく拡大させる集落であり，貞享 2 年（1685）以降には正式に三国湊と称されるようになった[2]。しかし中世において河口部に存在した港は，三国浦だけではなかった。中世から大寺院が立地する滝谷村や近世には泥原新保村と称される阿古江など，三国浦の周辺には複数の有力な港が存在しており，中世における三国湊とはこれらの港の総称としての地名だったとされている（赤澤 2015）。つまり近世の三国湊とは，中世に複数存在した港の一つである福井藩領の三国浦が成長したものであった。福井藩は慶長 6 年（1601）

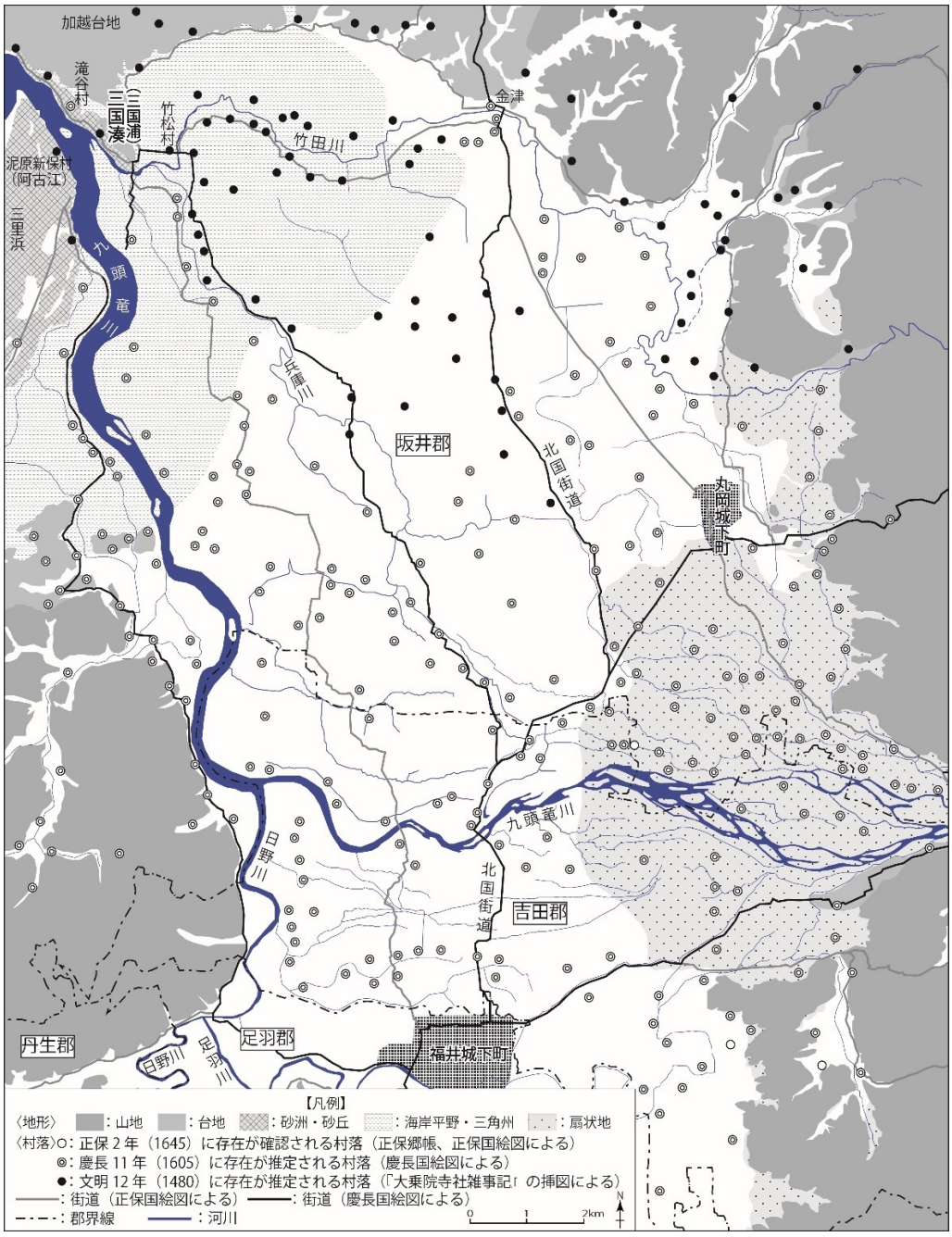

図 1　福井平野における村の形成時期と地形

基図は地形図「永平寺」,「三国」,「大聖寺」,「福井」（5 万分の 1，明治 42 年（1909）測量）。河川，郡界線は基図による。地形分類は土地条件図「福井」（2.5 万分の 1，国土地理院発行，2004 年）による。各村の記号は基図における集落の立地を基にして配置した。

表１　近世資料に記録された町の形成時期

町名	形成時期 〔備考〕
元新町	鑑:「正保二乙酉年(1645)人家建」。
下新町	鑑:「元新町追々家数増候ニ付二町ニ分ツ」。
上新町	鑑:「万治二亥年(1659)家建」。記録:「万治三庚子年(1660)人家建」。〔鑑:表町7町(平野町、久宝持町、下薬師町、上薬師町、清円寺町、喜宝町、平野口町)、裏町4町あり。町史:表町7町は元禄・宝永期(1688-1711)には成立。〕
今町	鑑:「享保二酉年(1717)迄ハ遠浅荒地ニ候を木屋甚右衛門平野屋吉右衛門願之上地盛引受人家建」。
木場町	鑑:「慶安元戊子年(1648)人家建」。
四日市町	鑑:「竹松村際ニ居住之所窪地難渋ニ付天和三年(1683)町続引越ス」。

注:資料の略称は次の通り。鑑:『三国鑑』、記録:『町内治定改方記録』。町史:三国町史編纂委員会編(1983)。鑑、記録の刊本は本文注4。

に結城氏が越前一国を拝領し，福井城を本拠としたことに始まる[3]。その後，結城氏は除封され，寛永元年（1624）に松平氏が福井藩に入った。また，これと同時期には丸岡城を拠点とする丸岡藩が福井藩から独立するなど，越前国内において複数の藩の成立が見られ，さらに貞享３年（1686）には福井藩の領地が半減されて幕府領が大幅に増加していた。このように越前国では複数の藩領や幕府領が分立するようになったが，近世を通じて福井藩に属していた三国浦は，藩から独占的権益が与えられ，越前諸藩の物資の集散地として繁栄していた。表１は近世の三国浦の明細帳[4]に記録された町の来歴を整理したものである。この表に見るように三国浦における新町の形成は，越前国での藩領・幕府領の分立が進む17世紀に集中していたことが分かる。

このように中近世移行期は幕藩権力による領地の再編成が行われていた時期であると言える。そして，この時期に中世港町の一つだった三国浦が大きく発達した要因として，この集落を福井藩が自領の外港として位置付けていたということがあったと想定される。そこで本稿では，三国浦の集落を対象範囲とし，とりわけ福井藩による関与に着目しながら，中近世移行期における景観変化を考察する。なお以下では三国湊という地名は中近世を問わず三国浦にあたる集落を示すものとして便宜上統一して使用する。次章以降では，まずⅡで三国湊の立地と地形環境を確認し，次にⅢにおいて中近世移行期における三国湊の景観を復原する。そして，Ⅳにおいて港と都市空間の変化を福井藩による整備との関係の点からまとめることとする。

Ⅱ　三国湊の立地と地形

三国湊は福井平野を流れる九頭竜川の河口に立地している（図１)。九頭竜川は越前国東部の山地から発し，大野盆地，福井平野を経て日本海に流れ出しており，また福井平野では南から日野川が合流し，河口付近では福井平野北部を流れる竹田川が合流する。広い範囲からの水が集まる九頭竜川の河口では北側の台地と南側の砂丘によって流路が限定されているため，河口の周辺は滞水しやすくなっていたと考えられ，海岸平野・三角州に分類される平野が広がっている。従って河口付近の平野は，元々河口に広がっていた潟湖が河川の堆積作用で陸地化していったものであることが分かる。

中世に三国湊を積出港としていた河口・坪江荘は，この海岸平野・三角州地域を含む福井平野北部を荘域としていた。河口・坪江荘はそれぞれ10郷と２郷からなっており，『大乗院寺社雑

事記』の文明12年（1480）8月3日の挿図（辻編 1933: 180）にはこれらの郷の所在が概念的に示されている。図1では，慶長11年（1605）頃作成の「越前国絵図」[5]（以降，慶長国絵図とする）を用いて，この挿図から河口・坪江荘における中世村落の立地を推定した。慶長国絵図は，正保郷帳と比べると正保期の数村をまとめて一つの村として記しており，また村の名称も「郷」や「荘」が付く地名で表記されている場合が多い。このことから慶長国絵図の村の表記は中世的な状況を反映しているとされ（福井県編 1990: 11-12），笠松（1971, 1972a, 1972b）によって慶長国絵図と正保郷帳の村々の対応関係が解明されている。図1では，正保期の村の立地から遡及して慶長期の村落の立地を推定し，さらに慶長国絵図の村名と『大乗院寺社雑事記』の挿図にある郷名を対照させることで河口・坪江荘の村落の立地を推定した。図1は遡及的な方法で推定したため，中世村落の立地の詳細は正確性を欠くが，広範囲での立地を概観することで河口部での開発の進行状況を把握し，潟湖の陸地化の様子を推定することができる。

図1では，海岸平野・三角州地域の中でも特に兵庫川からに竹田川かけての地域は河口・坪江荘の村が多く推定できる。また兵庫川から九頭竜川にかけての海岸平野・三角州地域は河口・坪江荘の村は推定できないが，慶長期にはすでに村落が立地しており，中世から開発が進んでいたと考えて間違いないだろう。従って九頭竜川河口の潟湖は中世の早くから陸地化が進んでいたことが分かる。さらに竹田川と九頭竜川の合流点付近に注目すると，竹松村は，正応3年（1290）の検注記録[6]において「武松」として確認できる。従って遅くとも13世紀末までには三国湊付近まで陸地化が及んでいたと考えられる。

次に，三国湊の都市空間が展開した場所の中近世における地形環境を確認しよう。三国湊では考古学的な発掘調査が行われておらず，中近世移行期における都市空間全体の等高線図を得ることはできない。そこで代替手段として平成元年修正の都市計画図「三国町全図」（2500分の1）から等高線を抽出し，これによって得られた等高線図を基盤に絵図資料や文献資料の内容を加えることで遡及的に中近世移行期の地形環境を把握した（図2）。なお，ここで用いた絵図資料は正保元年（1644）頃を景観年代とする「近世初期三国湊・滝谷出村絵図」（越前史料内田文書，国文学研究資料館蔵）[7]と安永7年（1778）から寛政3年（1791）を景観年代とする「三国浦絵図」（みくに龍翔館蔵）である（以降，それぞれ正保図，安永・寛政図と表記する）。正保図は三国湊の絵図資料の中で最古のものであり，都市空間全体が描かれているわけではないが，近世の都市空間が形成される以前の様子を読み取ることができる。安永・寛政図は三国湊の都市空間全体が描かれたものとして最も古く，実測によって作成されたものであり，集落の内部に加えて周辺の耕作地の様子も詳細に描かれている（福井県編 1990: 54-56）。

図2のように，九頭竜川・竹田川が合流する地域では，河川の北岸に細長い形の丘陵があり，Ⅲで復原する三国湊の都市空間はこの丘陵の川側に展開していた。この丘陵は，南東部では標高が20m以上ある一方で，北西部は6mから8mの緩やかな丘になっている。土地条件図[8]によると南東部の標高約8m以上の部分は台地であり，その他の北西部は砂丘に分類されている。

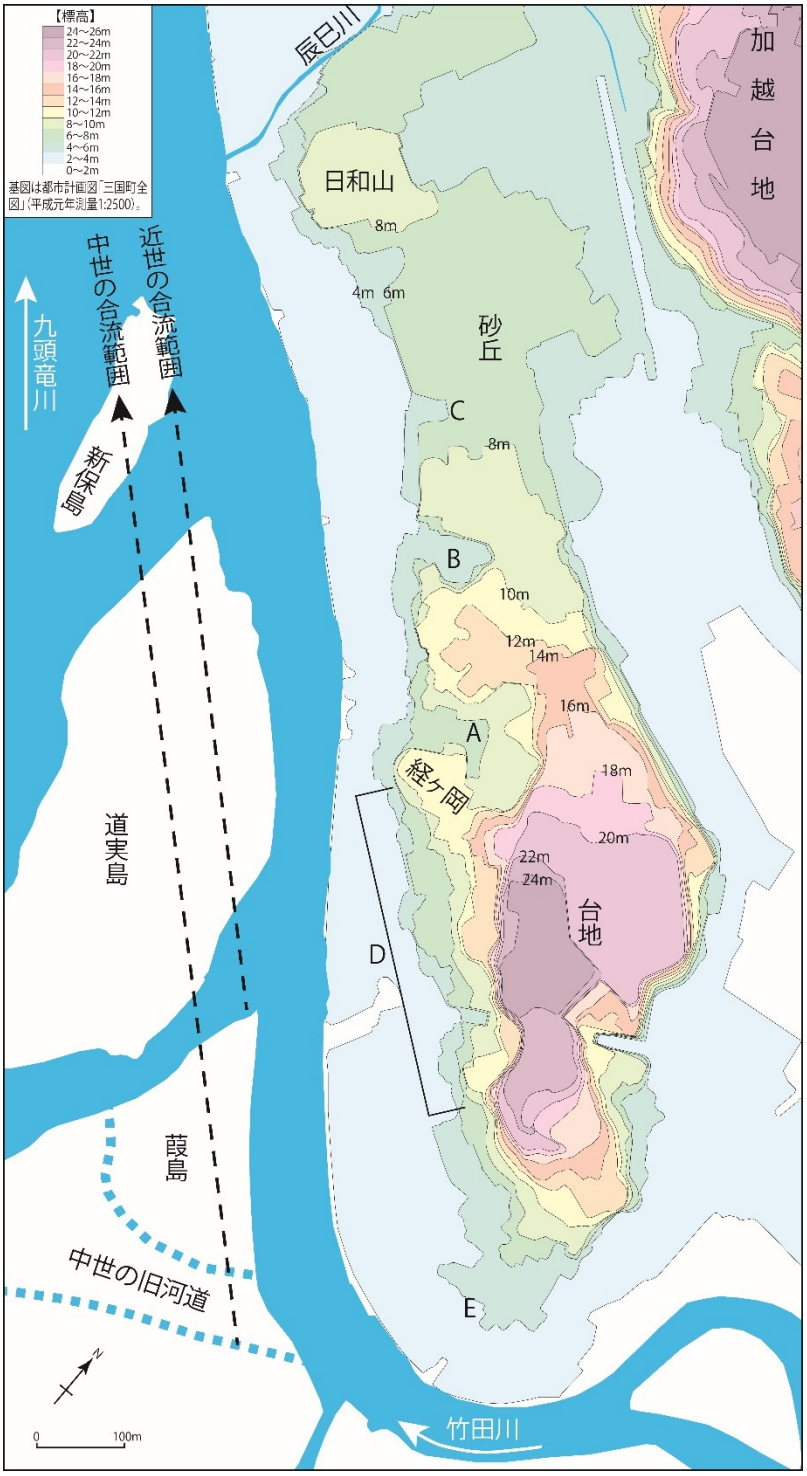
【標高】
24～26m
22～24m
20～22m
18～20m
16～18m
14～16m
12～14m
10～12m
8～10m
6～8m
4～6m
2～4m
0～2m
基図は都市計画図"三国町全図"(平成元年測量1:2500)。
辰巳川
加越台地
日和山
8m
4m 6m
砂丘
C
8m
B
10m
12m
14m
16m
A
18m
経ヶ岡
20m
22m
24m
台地
D
E
近世の合流範囲
中世の合流範囲
九頭竜川
新保鳥
道実島
葭島
中世の旧河道
竹田川
N
0
100m

図２　三国湊の地形

そしてこのような台地・砂丘と河川との間には標高 4m 以下の狭い平地が広がっていた。

台地の地形をさらに詳しく見ると，経ヶ岡から下流側には複数の尾根が河川の方向に張り出しており，各々の間に谷 A，B，C がある。また経ヶ岡より上流側では目立った尾根はないが，台地が川の方向に張り出す部分があり，経ヶ岡との間で緩やかな谷 D をつくっていた。正保図では谷 B に池が描かれ，「悪水溜」と墨書きされている。また谷 C も，小規模な谷ではあるが，正保図では谷 B と同様の池の描写と墨書きが付されている。つまり谷 B と C は中世には滞水する未開発の土地だったと推定される。一方で谷 A は，谷 B，C よりも大規模な谷であるにも関わらず，正保図に池の存在は確認できない。谷 B と C には近世に寺院が建立されるため，その際に滞水していた窪地は埋め立てられていたことが想定される。従って中世には谷 B，C の谷底は図 2 の標高よりも低く，川沿いの平地とほぼ同じ高さだった可能性がある。それに対して谷 A は，谷底の標高が B，C よりも 2m 程高いため，滞水することもなく安定した土地だったと考えられる。また谷 D も，台地に沿った緩やかな斜面地が広がっており，谷 A と同様に比較的安定した地形だったと言えよう。

台地の南端に目を移すと，8m 以下の等高線が南に大きく張り出しており，微高地になっていたことが分かる。この微高地の E 地点には安永・寛政図において岩が露出していた様子が描かれており，E の周辺は近世には岩崎町と称されていた。また天保 2 年（1831）には山王宮の境内地の整備に際して岩崎町の大岩を削って石垣に使用したとされる（印牧 2014: 18）。このように台地の南端では大きな岩盤が河川に向かって延びており，この岩盤上は安定した微高地になっていたと考えられる。

砂丘部分においては日和山が周囲の砂丘の中でも緩やかに高くなっている。しかし日和山を除くと砂丘部分に大きな起伏はなく，特に日和山の東には標高 6～8m 程の平地が広く展開していた。この砂丘の下流側は加越台地からの水を集める辰巳川によって限られており，辰巳川の西岸には低地が広がっていた。

次に中近世の三国湊の水際線を推定しよう。図 2 に示した水際線は明治 3 年（1870）の「三国港分間絵図」（みくに龍翔館蔵。以降では地籍図と略称する。）によって復原した。この水際線は安永・寛政図に見える水際線と概ね一致する。さらに正保図においても台地・砂丘の丘陵と河川の間には狭い平地が描かれている。従って図 2 の水際線は少なくとも近世初期からほとんど変化しておらず，中世の水際線を踏襲していた可能性もある。文献資料でも中近世を通じて三国湊の水際線が大きく改変されたという記録は確認できない。従って本稿では図 2 のように地籍図の水際線を中近世のものとして措定することとする。

また，既に確認したように九頭竜川河口部の潟湖は中世には三国湊の付近まで陸地化が進んでおり，三国湊が面する水域が九頭竜川と竹田川の合流点だった。近世にもこの水域は両河川の合流点であり，文化 12 年（1815）成立の地誌『越前国名蹟考』[9] では上流側から葭島，道実島，新保島という 3 つの中州が並んでいたことが記録されている。安永 2 年（1773）の『福井

藩下領村鑑下』[10] においても同様に 3 つの中州の存在が記され，加えて葭島は殿島や御島とも称されていたとある。3 つの中州は近世の絵図資料では正保国絵図に描かれているため，遅くとも正保 2 年（1645）頃には存在していたことが分かる。中でも道実島は中世には「出来島」と称され，明徳 4 年（1393）から応永 21 年（1414）にかけて三国湊と対岸の阿古江との間でこの島の所有をめぐる争論があったことが記録されている [11]。他の 2 つの中州については中世から存在を確認できる資料はない。しかし九頭竜川と竹田川の合流点であることを勘案すると，道実島よりも上流に位置する葭島は，道実島の形成と同時期かそれ以前から存在していた可能性も十分にある。

葭島は，上記のように安永 2 年（1773）および文化 12 年（1815）の資料では中州として示される。しかし安永・寛政図では「新保島」と「道実島」は中州であることが確認できる一方で，「御島」は平野からの陸続きの土地として描かれている。安永・寛政図が三国湊周辺の耕作地まで詳細に描かれた実測図であることを踏まえると，遅くとも 18 世紀半ば頃には葭島は南側の陸地と繋がっていたと考えて間違いないだろう。三国湊が面する水域は，九頭竜川に竹田川が合流する地点であるため，水流が対岸に比べて弱く，砂が特に堆積しやすかった。そのため福井藩は寛永 9 年（1632）に対岸に灌頂寺刎枠という堰堤を設け，九頭竜川の水流を三国湊側に迂回させて砂が堆積しにくいようにしたが，その後も砂の堆積は続いていたとされる（福井県編 1996: 410）。つまり三国湊が面する水域では，17 世紀前半から砂の堆積が進行しており，葭島の南側の河道もすでに埋まりつつあった可能性が高い。従って九頭竜川と竹田川は中世には葭島の南の河道から下流で合流していたが，近世には葭島と道実島の間の河道から下流で合流するようになっていたと考えられる。なお図 2 における新保島と道実島の復原は安永・寛政図に基づいている。また明治期には「殿島」という字名が残っているため [12]，この字の範囲を基に葭島と旧河道を復原した。

Ⅲ　中近世移行期における三国湊の景観変化

本章では，三国湊の景観を中世と近世に時期区分して復原し，景観変化の過程を考察する。Ⅰで述べたように，考察に際しては福井藩による景観変化への関与に着目するため，ここで復原対象とする景観要素には，寺社や町場だけでなく，番所や御蔵所のような藩に関連する施設も含めた。中世と近世の時期区分に関しても，福井藩が成立した慶長 6 年（1601）を基準とした。また，17 世紀に形成が始まる新町（表 1）では 18 世紀に人家が増加していたとされるため（玉井 1984: 68），本稿では中近世移行期をやや広く設定し，18 世紀末までの景観を把握した。景観復原に関しては，まずⅡで得られた等高線図上に地籍図によって屋敷地割と町割を重ねて地割復原図を作成した。そして各景観要素について文献資料や絵図資料から存在時期・立地・形態・機能を可能な限り把握し，これらを時期区分別に地割復原図に統合することで，中世と近世の景観復原図（図 3，図 4）を作成した。なお三国湊では中世の景観が窺える同時代資料はほと

んど見られない。そのため，景観復原に際し，文献資料は主に近世・近代の地誌や明細帳を使用し，絵図資料はⅡと同様に正保図と安永・寛政図を用いた。表 2 は各寺社に関して整理したものであり，以降では寺社の復原の根拠はこの表に基づく。

1　中世における三国湊の景観

玉井（1984）が指摘した通り，松ケ下町から岩崎町にかけては，近世に形成されたことが記

表 2　三国湊における寺社の存立時期と位置

No.	名称	存立時期／位置／宗派　〔 〕は備考、【 】は筆者による考察。
神社		
1	山王社	名蹟：天正期（1573-92）田谷寺（楢原郷田ノ谷村）の神像が流れつき、勧請。印牧（2014）：天文9（1540）高柳村から岩崎に山王像が流れ着いて千手寺正智院に奉納され、永禄7（1564）に創建。／名蹟：山王森町。現存。
2	彦名神社	神社明細：天正期（1573-92）焼亡、再興。／神社明細・印牧（2014）：再興時に日和山から滝谷村に移動。
3	牛頭天王社	神社明細：往古は式内枚岡神社。／安永・寛政図にあり。現存。神社明細：元和4（1618）枚岡から上薬師町・下薬師町の地に移動、万治2（1659）現在地に移動。枚岡は三国湊から加賀国への道の途上にあった地名。
4	愛宕社	印牧（2014）：延宝9（1681）建立。／鑑：経ヶ岡
5	住吉社	記録：元禄10（1697）創建。／鑑：四日市町。安永・寛政図にあり。現存。
寺院		
1	浄願寺	寺明細・台帳：和銅7（714）創建。鑑・記録：大永2（1522）創建。／安永・寛政図にあり。印牧（2014）：元は山王宮鳥居前大路の地にあり、現在地へ移転。鑑・記録による創建時期（大永2）は移転時期か。／寺明細・台帳：正慶元（1332）天台宗から真宗に、慶長11（1606）真宗東派に。
2	正智院（千手寺）	鑑・記録：養老期（717-24）創建。／安永・寛政図：「正知院」。鑑：白山千手寺正智院に泰澄作の本尊千手観音あり。／天台宗。印牧（2014）：正智院は幕末に性海寺末に。〔名勝・名蹟：千手寺は初め12の坊院があったが荒廃したため性海寺を招致した。記録：元禄14（1701）には「観音堂千手寺十二坊」あり。〕
3	西方寺	鑑：約1160年前に建立。／安永・寛政図：「西法寺」。／鑑：天台宗。
4	信行寺	寺明細：寛喜元（1229）創建。台帳：建保元（1213）創建。／現存。／真宗高田派
5	性海寺	名勝・名蹟・鑑・記録・台帳：延文元（1356）創建。／名勝・名蹟・鑑：永徳元（1381）宿浦から千手寺多門院跡に移動。安永・寛政図にあり。現存。／名勝・名蹟：移動により律宗から真言宗に。
6	専立寺	鑑・記録：永正13（1516）創建。台帳：文明期（1469-1487）には存在。／安永・寛政図にあり。現存。／坂井郡寺院台帳：文明年中（1469-1487）蓮如に帰依。鑑：真宗西派。
7	唯称寺	寺明細：文明7（1475）加賀国江沼郡山田村に創建。鑑・記録：大永2（1522）創建。／安永・寛政図にあり。現存。寺明細：加賀国から布施田村に移転し、三国湊に移転。【鑑・記録の創建時期（大永2）は現在地への移転時期か】／真宗東派
8	智敬寺	台帳：天徳2（957）坂井郡新郷角屋村に創建。鑑・記録：大永3（1523）創建。／安永・寛政図にあり。印牧（2014）：承元元（1207）以降大聖寺に移動。慶安（1648-52）以降現在地に移動。【鑑・記録の創建時期（大永2）が現在地での成立時期か】／印牧（2014）：承元元（1207）天台宗から真宗に。台帳：文明期（1469-87）高田派から東派に。
9	妙海寺	鑑・記録：享禄期（1528-32）創建。印牧（2014）：享禄元（1528）創建。寺明細・台帳：弘治3（1557）創建。／安永・寛政図にあり。印牧（2014）：弘治元（1555）以降に岩崎町から現在地に移転。【寺明細・台帳による創建時期（弘治3）は現在地への移転時期か。】／印牧（2014）：弘治元（1555）真言宗から日蓮宗に。
10	憶念寺	寺明細・台帳：天正元（1573）創建。享保4（1719）中興。／現存。／真宗高田派。
11	勝授寺	台帳：応長元（1311）足羽郡大町村に創建。／安永・寛政図にあり。台帳：天正9（1581）御所垣内に移動。記録：天正17（1589）元町に移動。台帳・記録・鑑：元禄2（1689）現在地に移動。／真宗西派。
12	円乗寺	台帳：文禄2（1593）創建。／台帳：大門。現存。／真宗東派。
13	西光寺	鑑・記録：寛永5（1628）創建。印牧（2014）：寛永9（1632）に清向院の北の谷の沼を埋め立てて正保3（1646）竣工。【鑑・記録の創建時期（寛永5）は清向院のことか】／安永・寛政図にあり。現存。／浄土宗
14	清向院	〔13西光寺を参照〕／安永・寛政図にあり／浄土宗
15	専修院	鑑：承応2（1653）創建／鑑・安永・寛政図：日和山／鑑：浄土宗
16	専了寺	台帳：長享元（1487）玉江村に創建／安永・寛政図にあり。台帳：寛文元（1661）平野町に、天和元（1681）現在地に移転。／真宗東派
17	金鳳寺	台帳：永正期（1504-21）創建／安永・寛政図にあり。現存。鑑・台帳：貞享4（1687）日和山に移動／曹洞宗。
18	妙法寺	寺明細：延享2（1745）創建。／安永・寛政図にあり。／鑑：日蓮宗。
19	法円寺	寺明細：天正19（1591）創建／安永・寛政図にあり。現存。宝暦元（1751）泥原新保から現在地に移動。／真宗高田派
20	真龍寺	台帳：明和7（1770）創建。／現存。／真宗東派。
21	恵雲寺	寺明細：安永4（1775）創建。／安永・寛政図にあり。現存。／曹洞宗。
22	久昌寺	寺明細：寛政2年（1790）創建。／現存。／曹洞宗。

注：資料の略称は次の通りである。鑑：『三国鑑』、記録：『町内治定改方記録』、名勝：『越前国名勝志』、名蹟：『越前国名蹟考』、神社明細：『坂井郡神社明細帳』、台帳：『坂井郡寺院台帳』、寺明細：『坂井郡寺院明細帳』。名勝、神社明細、台帳、寺明細の刊本はそれぞれ杉原・松原編(1971)、福井県立図書館(2004a)、同(2004b)、同(2012)。鑑、記録、名蹟の刊本は本文注4、9。

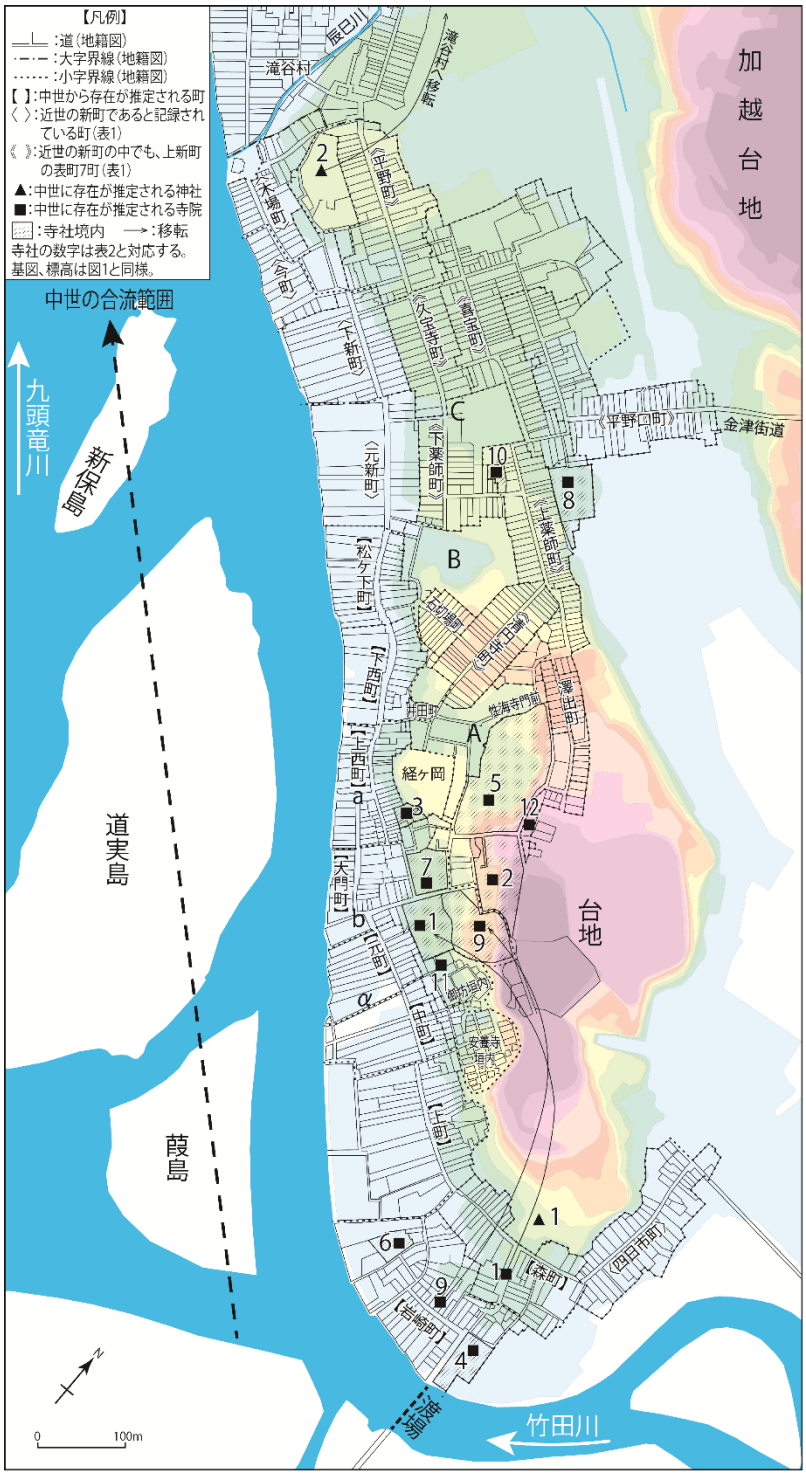
【凡例】
：道（地籍図）
：大字界線（地籍図）
：小字界線（地籍図）
【 】：中世から存在が推定される町
〈 〉：近世の新町であると記録されている町（表1）
《 》：近世の新町の中でも、上新町の表町7町（表1）
▲：中世に存在が推定される神社
■：中世に存在が推定される寺院
：寺社境内　→：移転
寺社の数字は表2と対応する。
基図、標高は図1と同様。
中世の合流範囲
九頭竜川
新保島
道実島
葭島
加越台地
台地
辰巳川
滝谷村
滝谷村へ移転
《平野町》
〈木場町〉
〈今町〉
〈下新町〉
《久宝寺町》
《喜宝町》
《下薬師町》
《上薬師町》
〈元新町〉
【松ケ下町】
【下西町】
【上西町】
【天門町】
【元町】
【中町】
【上町】
【森町】
【吉崎町】
《四日市町》
〈平野口町〉
金津街道
石切場
《西光寺門前》
西田町
性海寺門前
澤出町
経ケ岡
御竹垣内
安養寺
垣内
竹田川
0
100m

図３　中世の三国湊

録される下流部や台地・砂丘上の町（表 1）に比べると，屈曲を繰り返す曲線状の道が目立っているため，中世から存在した町であることは間違いないだろう（図 3）。これらの中世の街路形態と地形の関係を見ると，上西町の曲線街路は経ヶ岡の形に沿っており，また中町と上町の境の屈曲も台地の張り出しに対応していることが分かる。このように川沿いの街路形態は，台地の地形に対応している傾向があることが分かる。しかし街路 ab は台地の地形に反して河川に近づいており，水際線に並行している。また岩崎町の街路も，岩盤の微高地に対応してはいるが，他の町に比べると街路が水際線に近づいて並行していると言える。従って街路 ab と岩崎町の町場は，周囲の町に比べて水際線との結びつきが特に強かったと考えられる。

ここで寺社の立地に着目すると，とりわけ谷 D の経ヶ岡に近い部分から谷 A の奥にかけての地域に寺院がまとまって分布しており，また岩崎町の周辺にも複数の寺社が立地していた。このような寺社の集中は，水際線に沿った街路 ab と岩崎町の町場の立地と対応しているように見える。谷 D には古代から千手寺があったとされており，12 もの坊院で構成されていたという。千手寺の正確な範囲は不明だが，正智院（■2）に本尊が納められていたことや，性海寺（■5）の境内が坊院跡の一つであるとされることから，千手寺の坊院群は正智院（■2）を中心に広がっていたと考えられる。正智院（■2）の周りの斜面には数段の平坦地があり，これらの平坦地に坊院群が立地していたと考えられる。16 世紀に浄願寺（■1）や妙海寺（■9），唯称寺（■7）が立地する平坦地も坊院群の跡地だったのだろう。正智院（■2）からは寺院群の中軸線と見られる直線道が川に向かって下っており，街路 ab の町と結びついている。さらに，b 周辺の大門町という地名は千手寺の門があったことに由来すると伝わることを勘案すると，街路 ab を含む大門町は，千手寺が関わって早くから形成された港町だったと考えられる。また岩崎町の周辺においても，微高地上に古代から浄願寺（■1）が立地し，より水際線に近い場所には信行寺（■4）などの中世寺院が立地していた。従って岩崎町の地には早くから中世寺院に関わる港が存在し，それに付随して町が形成されていた可能性がある。近世の岩崎町には渡場が設けられており [13]，慶長国絵図においても九頭竜川西岸を北上する街道が九頭竜川と竹田川を渡って三国湊に繋がっていたことが確認できる（図 1）。従ってこの渡場は近世初期には機能しており，中世における岩崎町の港機能の一部を踏襲したものだったかもしれない。

このように中世には，主要な港に付随して大門町と岩崎町が形成されたと推定され，その他の川沿いの町は台地沿いの比較的安定した地形に自然発生的に成立していったと考えらえる。町名に着目すると，大門町の上流側に隣接する元町は，他の町と比べて早くに存在していたことが窺え，大門町からの拡大によって形成されたと考えられる。また上町は，大門町や岩崎町に比べて地形的に高所にあるわけではないため，大門町から見た上流側にあることを示しているのだろう。さらに大門町の下流側に続く上西町，下西町の町名も，大門町の西側の町であることを意味していると思われる。従って中世の町場は主に大門町を中心とした都市空間の拡大によって成立していったと考えられる。なお下流側においては正保図に松ケ下町が描かれているた

め，近世初期までには松ケ下町まで都市空間が拡大していたと言える。

また中世における街道交通と都市空間の関係に着目すると，慶長国絵図において上町から岩盤の微高地を越えて東側へ向かう街道が確認できるため（図 1），森町も近世初期までには形成されていたと考えられる。さらに正保図には谷 A から台地に登る道があり，谷 B の上の台地を通って北東へ向かうように描かれている。この街道は近世において谷 A から清円寺町を通り，上薬師町の北西端で曲がって台地を下り，平野口町を経て北東へ続く道に対応していると考えられ，安永・寛政図ではこの道に「金津街道」と記されている。この街道が台地を下りる地点の付近には，16 世紀後半に憶念寺（■10）が立地しており，また智敬寺（■8）も 16 世紀前半に存在していた可能性がある。これらの寺院の立地は，港から大きく離れている点で他の寺院とは異なっており，金津街道に沿ったものだったと考えられる。つまりこの街道は中世末には既に機能しており，大門町周辺の港町と金津などの内陸地域を繋げていた可能性が高い。清円寺町，上薬師町，平野口町は近世に形成される上新町の一部であるため（表 1），中世の金津街道沿いに町の形成はなかったと考えられる。ただし，街道の起点となる谷 A は，既述のように安定した広い谷であり，性海寺（■5）も立地するため，寺や人家が建っていたのかもしれない。

以上のような中世の都市空間の形成過程に関して，Ⅱで復原した九頭竜川と竹田川の合流範囲との関係という点から改めて確認しよう。図 3 のように中世の合流範囲において，大門町は道実島と葭島の間の水域に面し，岩崎町も葭島の南側の河道に面していた。このように中世における都市空間形成の起点となった大門町と岩崎町はいずれも，九頭竜川と竹田川が繋がる水域に面して形成されていたことが分かる。実際に中世の三国湊は，竹田川周辺に広がる河口・坪江荘（図 1）の積出港として竹田川舟運と日本海海運を結びつけていたことは間違いない。また元亀 3 年（1572）には府中から三国湊までの舟運があったことが確認されており（福井県編 1994a: 821），日野川・九頭竜川の舟運の拠点として三国湊が機能していたことも分かる。つまり中世の三国湊は竹田川舟運と九頭竜川舟運，日本海海運を繋げる港であり，大門町と岩崎町はこの機能に適した立地だったと言える。三国湊では 15 世紀半ばには問丸の存在が確認されており，有力な商人が物資の取引を担っていたことが推定されている（福井県編 1994a: 847）。中世の有力商人としては森田家の存在が確認されており，森田家は織田信長の一向一揆平定にあたって船を提供するなど [14]，戦国期から近世初期にかけて領主権力と結びついて主に廻船業で活躍していた（印牧 1998: 48-50）。その後も近世を通して三国湊に居住した森田家は，地籍図では元町のαにその屋敷地があった。森田家の本家は近世に移動した記録はないため，中世から屋敷地αに立地していたと考えてよいだろう。このような中世の有力商人の存在も，大門町から岩崎町にかけての港町が竹田川・九頭竜川の河川舟運と日本海海運を繋げる拠点として発達していたことを示していると言えよう。

ただし道実島と新保島の間の水域も竹田川と九頭竜川の合流点であるにも関わらず，中世の港は推定できない。地形条件から見ると，大門町周辺の都市空間は背後の高い台地によって風

が防がれていたと考えられ，またこの台地がつくる安定した谷や斜面に有力な寺院群が立地していた。一方で松ケ下町から下流の砂丘は台地に比べると低平であり，谷も滞水するような不安定なものだった。つまり松ケ下町から下流の合流部は，中世には都市空間を形成できるほど安定した地形条件ではなかった可能性を指摘できる。

2　近世における三国湊の景観

近世には正保期以降に都市空間が大きく拡大した（表 1，図 4）。まず正保 2 年（1645）に松ケ下町の下流側に元新町ができ，さらに元新町から下新町が分立した。また同時期には日和山の麓に木場町が形成された。そして川沿いの町の形成からやや遅れて万治 2～3 年（1659-60）に砂丘・台地上に上新町が形成され始めた。上新町を主に構成する清円寺町・上薬師町・下薬師町・久宝寺町・平野町・喜宝町・平野口町の表町 7 町は，元禄・宝永期（1688-1711）には成立していたとされる。また上新町の表町 7 町が成立する頃には，森町に隣接して四日市町が成立し，下新町と木場町の間の空閑地に今町が成立した。

このように玉井（1984）と宮本（2005c）が指摘した通り，近世の新たな都市空間は中世由来の都市空間から下流側の川沿いおよび台地・砂丘上に広く形成されていた（図 4）。他方で中世由来の都市空間においては，勝授寺（□11）の移転や台地上での寺院（□20，□21）の建立を除くと，寺社や街路に中世からの変化はほとんど想定できないが，福井藩をはじめとした幕藩権力に関わる施設が配されている点で景観に変化が窺える。以下では（1）中世由来の都市空間と（2）下流側の新町に分けて中世から近世への景観の変化を検討する。

(1)　中世由来の都市空間の変化

河川沿いの町では，安永・寛政図において上町・中町に「御蔵」，「本保御蔵」，「御預御蔵」という 3 つの御蔵所の敷地（図 4，③～⑤）が確認できる。敷地③の「御蔵」は福井藩領の御蔵所であると考えられる。「本保」とは越前国の幕府領を管轄する陣屋の一つであり，また享保 5 年（1720）に幕府領の大部分が福井藩の預所とされたことから（福井県編 1996: 36），敷地④の「本保御蔵」と敷地⑤の「御預御蔵」はそれぞれ幕府直轄領と幕府領福井藩預所の年貢米を収納していた御蔵所であると考えられる。三国湊の御蔵所は，貞享 2 年（1685）に城米船が遭難した際に濡米を「三国御蔵」で保管したことが記録されているため [15]，この頃には存在していたと言える。ただし越前国において幕府領が大きく増加したのは貞享 3 年（1686）のことである。図 4 のように幕府領の御蔵所（④⑤）は福井藩の御蔵所（③）と同等の規模があり，また『三国鑑』（三国町史編纂委員会編 1973: 2）では福井藩の御蔵所（③）に 10 棟の蔵があったのに対して幕府領の御蔵所（④⑤）にも 7 棟もの蔵の存在が記録されている。このような御蔵所の規模を考慮すると，幕府領の御蔵所（④⑤）は幕府領が急増した貞享 3 年以降に設けられたものである可能性が高いと言えよう。従って貞享 2 年（1685）に確認される「三国御蔵」は福井藩の

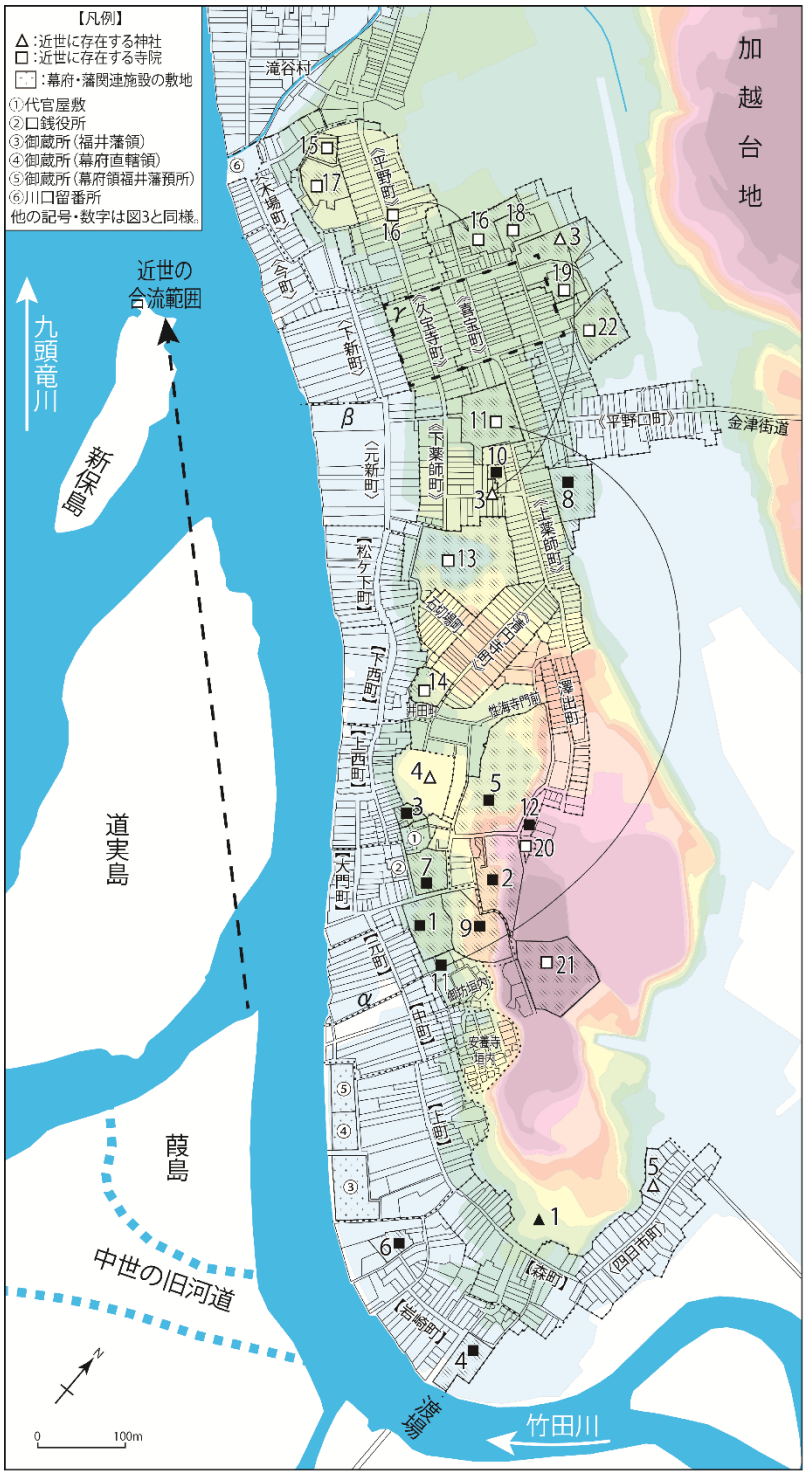
【凡例】
△：近世に存在する神社
□：近世に存在する寺院
：幕府・藩関連施設の敷地
①代官屋敷
②口銭役所
③御蔵所（福井藩領）
④御蔵所（幕府直轄領）
⑤御蔵所（幕府領福井藩預所）
⑥川口留番所
他の記号・数字は図3と同様。
加越台地
滝谷村
近世の合流範囲
九頭竜川
新保島
道実島
葭島
中世の旧河道
金津街道
竹田川
日本海
0
100m

図４　近世の三国湊

御蔵所（③）だったと考えられる。また，敷地④⑤には御蔵所ができる以前から福井藩に関連する施設があった可能性もある。元禄８年（1695）に中町で生じた火事の記録[16]では「塩屋甚右衛門ゟ上ハ御殿迄焼失」とあり，御殿が中町の上流側にあったことが推定できる。この御殿は福井藩の施設であり，貞享４年（1687）には藩主が滞在していた記録もある[17]。図４を見ると中町とその上流側の上町との町境には幕府領の御蔵所（④⑤）が面しているため，敷地④⑤が元は御殿だった可能性も指摘できる。つまり元禄８年（1695）までは敷地④⑤に御殿が配されており，御殿の焼亡後に幕府藩の御蔵所が増設されたのかもしれない。従って敷地③④⑤は17世紀半ばには御蔵所・御殿の用地として福井藩が開発していたと考えられる。

次に御蔵所・御殿の配置を町の屋敷地の形態との関係からより詳しく検討してみよう。近世の三国湊における川沿いの屋敷地は，表と裏をそれぞれ街路と水際線に面しており，川沿いの船から積み上げた荷物を屋敷地内の通路で表通に輸送して商売を行うのが一般的だったとされる（玉井 1984: 76）。しかし図４において上町・中町の屋敷地の裏は御蔵所・御殿の敷地③④⑤に阻まれて河川に面していない。上町・中町の屋敷地と敷地③④⑤の境の形を見ると，屋敷地の裏は敷地③④⑤の形に合わせて区切られており，中には敷地③や⑤の角が食い込んでいる屋敷地も見られる。一方で御蔵所・御殿の敷地③④⑤は，河川に合わせた矩形の敷地であり，上町・中町の街路の方向とは無関係に配されていた。従って御蔵所・御殿が設けられる以前から，上町・中町の屋敷地は河川に面しておらず，水際線と屋敷地の間に空閑地があったと考えられる。つまりこの空閑地の水際に御蔵所・御殿の敷地③④⑤が設定され，その後で御蔵所・御殿に向かって上町・中町の屋敷地が裏を延ばしていったという過程が窺える。竹田川と九頭竜川の合流点では17世紀前半には既に砂の堆積が激しく，葭島南側の河道が埋まりつつある程だったということを考慮すると，上町・中町の川沿いに想定される空閑地も河川の堆積作用によって形成されていた可能性がある。そしてこうした地形の変化によって，大門町より上流側の中世港町において徐々に港の機能が低下していたと考えられる。戦国期から元町に居住していた有力商人の森田家（屋敷地α）は，近世初期にも領主権力と結びついて主に廻船業で活躍していたが，元禄５年（1692）を契機に勢力を落としていった（印牧 1998）。こうした豪商の衰退も，17世紀に大門町より上流側における港の機能が低下していたことを示しているのかもしれない。従って近世初期における御蔵所・御殿の設置は，衰退しつつあった上町・中町の港を福井藩が再開発したものだったと言えるのではないだろうか。

このように福井藩によって整備された上町・中町の港が担っていた機能について見てみよう。ここでは特に御蔵所の機能に着目して，福井藩による上町・中町の港の位置づけを検討する。図５は三国湊周辺における元禄期の村の分布に，安永２年（1773）の『福井藩下領村鑑下』[18]から得られた各村の年貢米の収納場所に関する情報を重ねたものである。なおこの資料は九頭竜川以北の福井藩領の村に関する明細帳を集めたものであるため，ここでは九頭竜川以北の地域の状況から御蔵所の収納範囲を推定する。『福井藩下領村鑑下』によると九頭竜川以北の村の年

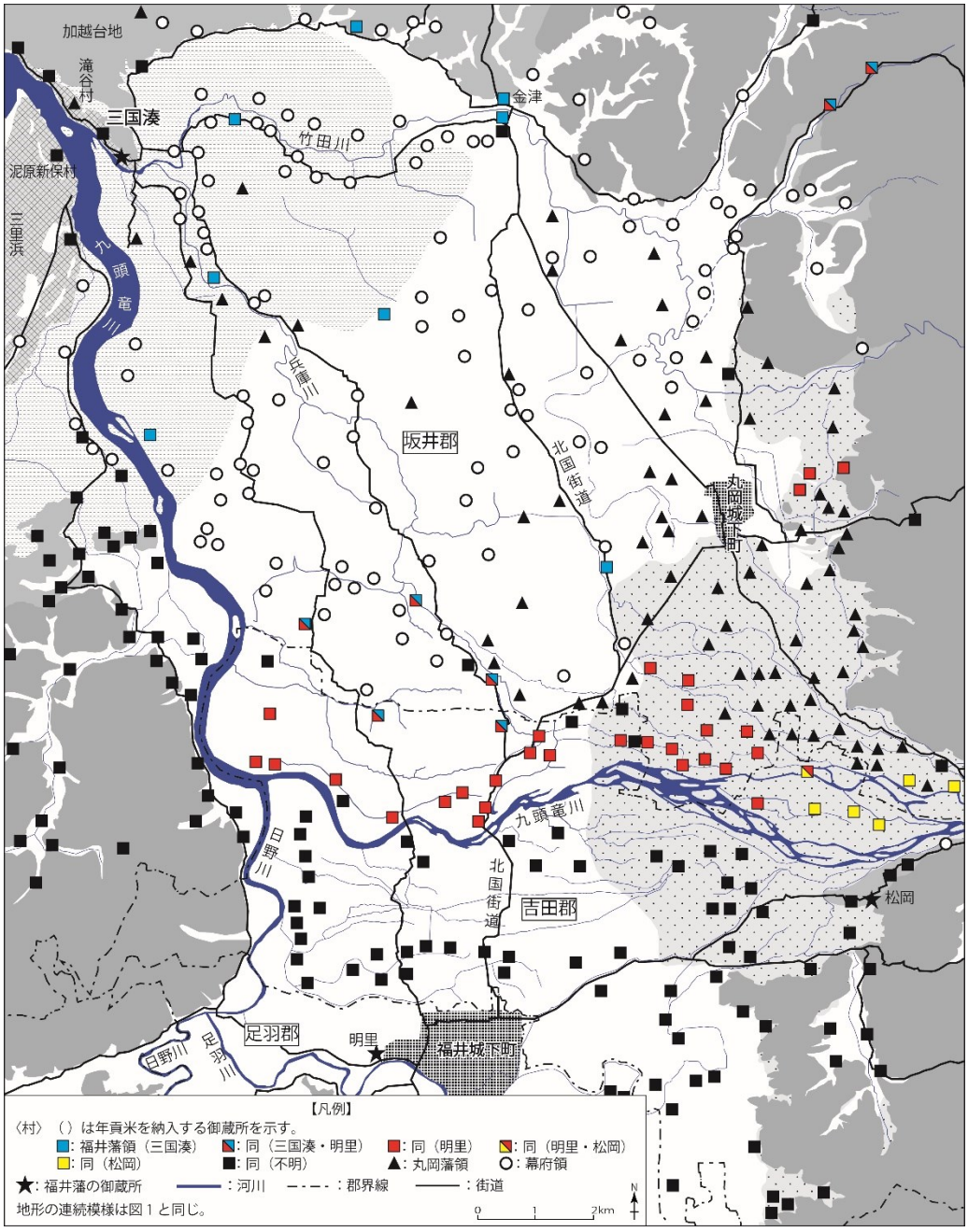

図５　福井平野における福井藩の御蔵所の年貢米収納範囲

基図，地形分類，河川，郡界線は図１と同様。村の立地は元禄 14 年（1701）の『越前国郷帳』（福井県編（1921）所収）と「越前国之図」（福井県文書館蔵，「デジタルアーカイブ福井」（https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-1001814-0）2022 年 12 月 30 日最終閲覧）による。年貢米の納入先は『福井藩下領村鑑下』による。元禄期には松岡藩と葛野藩も存在したが，安永 2 年（1773）には既に廃され，領地はそれぞれ福井藩領と幕府領に編入されていた。従って本図では福井藩領と幕府領に含めた。街道は，元禄 14 年「越前国之図」では詳細でないため，正保国絵図によった。

貢米は，三国湊，松岡，明里に設けられた御蔵所に収納されていた。図 5 を見ると，三国湊を収納場所とする村は九頭竜川以北の平野に散在していたことが分かる。九頭竜川以北には幕府領の村々が多く立地しており，三国湊に設置された幕府領の御蔵所に年貢米を輸送していたと考えられる。これらの幕府領の村々は，正保郷帳ではほとんどが福井藩領であり，貞享 3 年（1686）以降に幕府藩領になった地域だと推定される。従ってこれらの村々は貞享 3 年以前には三国湊の福井藩領の御蔵所に年貢米を送っていた可能性が高い。しかし九頭竜川以北の平野の中でも，九頭竜川が西流する部分の河川沿いでは，ほとんどの村が明里の収納範囲になっていた。つまり九頭竜川沿いの村であっても，舟運で河口の三国湊へ運ぶのではなく，陸運や日野川舟運を使って福井城下に近接する明里に輸送していたことが窺える。従って三国湊の御蔵所は，西方向に流れる九頭竜川の周辺よりも北側の地域を主な収納範囲としていたと推定できよう。また交通網を見ると，兵庫川などの小河川はいずれも北流し，九頭竜川ではなく竹田川に合流している。また，いずれの街道も南北方向に延びているため，平野西部を北流する九頭竜川とは交わらずに竹田川に繋がっている。このように九頭竜川以北の平野では舟運・陸運ともに竹田川に集まっていたため，三国湊への年貢米輸送には竹田川舟運が重要だったことが推定できる。このような御蔵所の主な収納範囲と交通網を勘案すると，福井藩による三国湊の御蔵所の設置は竹田川舟運の利用を意図したものだったと考えられる。17 世紀には竹田川と九頭竜川の合流範囲の上限が葭島南の河道から道実島と葭島の間の河道に徐々に移行していたとすると（図 4），元町から上流の港は両河川の合流範囲から外れ，あくまで竹田川のみに面した港になりつつあったと推定できる。このように従来の機能が低下していた上町・中町の港を，福井藩は竹田川舟運による年貢米輸送のターミナルとして開発していたと言えよう。

それでは，年貢米輸送の拠点として港が使用されることによって，中世由来の都市空間にはどのような影響があったのだろうか。三国湊の御蔵所のうち幕府領の御蔵所に関しては，宝暦 10 年（1760）頃の東長田陣屋支配地の年貢米輸送についての記録が佐藤家文書に残っており，阿部（1967）はこの資料から三国湊における年貢米の積出作業の詳細を整理している。阿部（1967）によると，東長田陣屋支配地の年貢米の積出に際して，廻船への積載を検分するために代官手代 1 名と立合庄屋 4 名が三国湊に出張しており，その宿所には三国湊の商人である森田藤蔵と丹後屋茂右衛門の屋敷が指定されていた。つまりこれらの 2 名の屋敷は，東長田陣屋支配地の年貢米の積出が行われる期間には，代官手代や立合庄屋が出入りする事務所になっており，とりわけ丹後屋はこの期間以外の平時においても東長田陣屋の蔵の修理や管理を任されていたという。さらに丹後屋は村々の米を買い取る米問屋でもあり，村々で納める年貢米が不足した際には貸米を行っていたとされる。これら宿所を務めた 2 名の屋敷地は御蔵所の近くにあったとされており，地籍図においても，屋号のみの一致ではあるが，中町に丹後屋の屋敷地が確認できる。また，御蔵所の土地は三国湊の住人の所有地を借り受けたものであり，幕府領の御蔵所の地主は日崎五右衛門，たばこ屋小兵衛，坂口与三兵衛，平野屋長右衛門だったとされる

（阿部 1967: 379）。これらのうち，日崎氏の除く 3 名に関しては，地籍図において上町と中町に屋号・苗字が一致する住人の屋敷地が確認でき，近世から御蔵所の近くに居住していた可能性が高い。このように，近世の三国湊においては御蔵所は中世由来の都市空間の住人から土地を借り受けて設置され，御蔵所に関わる業務も一部が中世由来の都市空間の住人に委託されていたと推定できる。幕府領の御蔵所には東長田陣屋以外の陣屋が管轄する蔵もあったため，森田家や丹後屋以外にも，中世由来の都市空間に居住した商人が各陣屋の宿所に指定されていたと考えられる。また福井藩の御蔵所に関しても，幕府領の御蔵所と同様に上町・中町の商人の土地を借り受けて設置され，御蔵所周辺の商人が蔵の運営や管理に関わっていた可能性が考えられる。つまり幕藩権力は中世から発達していた都市空間に隣接して御蔵所を設置することで，中世から港の機能に関わっていた人々を利用し，年貢米の積出を円滑に行えるように図っていたと言えよう。

また，中世由来の都市空間の住人は，御蔵所以外にも幕藩権力との関係が窺える。例えば元禄 15 年（1702）から始まる福井藩札の発行には，これを担う札場として松屋庄兵衛，江波与右衛門，田崎弥五郎という 3 名の三国湊商人が指定されていた[19]。江波家は近世初期から大門町に居住していたとされ（印牧 1998: 50），また地籍図および文久元年（1861）「川端通絵図」[20] において中町と大門町に「田崎」，「松屋」という屋号・苗字の屋敷地が確認できる。このように中世由来の都市空間は，御蔵所をはじめとした幕藩権力に関連する様々な業務を請け負う商人らが居住する町場として近世を通じて維持されていたと考えられる。また安永・寛政図では，唯称寺（■7）の周辺に代官屋敷（①）や入津料を管理する口銭役所（②）といった福井藩に関わる施設が立地していたことが分かる。このような御蔵所以外の藩の施設の配置も，中世由来の都市空間の人々と幕藩権力との結びつきを示唆するものであると言えよう。

⑵　下流部における新町の形成

正保期以降にできた新町の中でも，中世由来の町より下流側の川沿いにできた元新町，下新町および台地・砂丘上の上新町は，他の町と比べて全体的に直線状の街路で構成され，屋敷地の背割線も整っている部分が多い。玉井（1984）はこうした形態的特徴に加え，正保元年（1644）における福井藩の川口留番所の移転が新町形成の契機になっていたことから，元新町・下新町・上新町の形成は福井藩の意向によるものだったとしている。さらに新町の開発が始まってから今町の成立までに 70 年程かかっていることや，上新町の人家が増加するのが 18 世紀以降であることを示し，これらの新町が一時に成立したものではなく徐々に形成されたものだった可能性を指摘している。そこで以下では図 4 において主に屋敷地割に着目し，川沿いの元新町・下新町と砂丘・台地上の上新町の形成過程を復原する。

まず川沿いの元新町・下新町については，街路が砂丘の形状に平行であり，地形に対応して設定されていたことが分かる。既述のようにこれらの新町が形成された川沿いは，中世には都市

空間には適さない不安定な地形条件であったと推定される。従って福井藩による元新町・下新町の形成は，地形条件の悪い土地を開発し，直線街路の設定を行うことで進められていたと考えられる。また，元新町と下新町の境界の屋敷地割に着目すると，元新町側の屋敷地βは表と裏をそれぞれ街路と水際線に面する短冊状の敷地であり，一方で下新町側の屋敷地は屋敷地βに阻まれて水際線まで敷地を延ばせていない。従って屋敷地βは下新町の屋敷地に先行して成立していたことが分かる。つまりこれらの新町では，計画的に造成された直線街路を軸として，松ケ下町の端から下流に向かって徐々に屋敷地が形成されていったという過程が読み取れる。

次に台地・砂丘上に形成された上新町の形成過程を復原する。既に推定したように清円寺町，上薬師町の街路は中世の金津街道を踏襲したものであるため，これらの新町は，中世の街道が直線状に整備され，背割線が整った屋敷地が配されることで成立していったことが窺える。一方で下薬師町と久宝寺町の道はそれぞれ元新町と下新町の街路と平行であり，また平野町や喜宝町の街路も久宝寺町と同じ方向で形成されていることが分かる。とりわけ破線で囲んだ範囲γの都市空間は，砂丘上の広い平地に形成されたものであり，久宝寺町，喜宝町，平野口町の平行な直線街路が等間隔に並んでいる。また範囲γ内では，屋敷地の背割線も整った直線状であり，各街区の中で偏らずに中央を通っている。こうした形態から，範囲γの街路と屋敷地割は一時に面的に設定された可能性が高いと言える。範囲γの北端の牛頭天王社（△3）は万治 2 年（1659）からこの地に立地しており，それ以前には上薬師町・下薬師町が形成される場所にあったとされる。大門町を中心とした都市空間は近世初期には松ケ下町まで拡大していたため，牛頭天王社（△3）の旧地は中世由来の都市空間の縁辺にあたる。つまり牛頭天王社（△3）は上新町の形成が始まるのとほぼ同時期に，既存の都市空間から離れて砂丘の端に移転したということになるため，この神社の移転と上新町の形成は関連していたと考えられる。従って牛頭天王社（△3）と川沿いの町の間を占める範囲γは，神社の移転に伴って面的に開発された可能性が高い。以上のように形成開始当初の上新町は，中世の金津街道を軸とした開発と砂丘上における範囲γを中心とした面的な開発という 2 パターンの開発によって都市空間の形成が進んでいたと考えられる。

金津街道を軸とした新町と範囲γの新町の狭間には，元禄 2 年（1689）に勝授寺（□11）が移転してきたとされ，この寺院の北東側には喜宝町と平野口町の屋敷地割が広がっている。この屋敷地割は範囲γに比べるとやや乱れており，また範囲γの喜宝町から続く街路は，わずかに屈曲して勝授寺（□11）を避け，境内の北東面を通って金津街道に繋がる。従って勝授寺（□11）の北東の都市空間は，勝授寺（□11）が移転してきた元禄 2 年（1689）以降に徐々に形成されたものであると考えられる。加えて金津街道には喜宝町と平野口町が沿っていることから，勝授寺の北東の都市空間は範囲γから金津街道の方向に形成されていったと推定される。また上薬師町と清円寺町の境を見ると，上薬師町の屋敷地が清円寺町の屋敷地の背割線を斜めに限っているため，上薬師町の屋敷地が清円寺町の屋敷地に先行して形成されたことが分かる。つ

表３　近世三国湊において海運に関わる商人の屋敷地

商人名	廻船との関わり	屋敷地の立地
名村屋安右衛門	留帳：寛政9（1797）	留帳（寛政2（1790））・絵図：中町
魚屋次郎八	留帳：寛政9（1797）	大門（享保6（1721））・絵図：大門町
紅屋喜兵衛	問丸：延享2（1745）	松ケ下（嘉永3（1850））：上西町
新郷屋嘉兵衛	留帳：寛政9（1797）	松ケ下（天保15（1844））：松ケ下町
平野屋利右衛門	留帳：寛政2（1790）	松ケ下（天保5（1834））：松ケ下町
宮腰屋五郎兵衛	留帳：寛政3（1791）	松ケ下（延享5（1748））・絵図：松ケ下町
内田惣右衛門	留帳：享和3（1803）	絵図：元新町
木屋甚右衛門	留帳：寛政4（1792）	留帳（寛政2（1790））・絵図：元新町
沢屋次左衛門	問丸：安政6（1859）	留帳（寛政2（1790））：下新町
戸口屋久四郎	問丸補遺：文久2（1862）	留帳（寛政2（1790））：下新町
加戸屋又兵衛	大門：宝暦7（1757）	大門（宝暦7（1757））：今町
米屋武助	留帳：寛政2（1790）	留帳（天明9（1789））：今町
銭屋五兵衛	留帳：文化10（1813）	留帳（寛政2（1790））・絵図：今町
田中屋文吉	留帳：寛政5（1793）	大門（文政12（1829））：今町
平野屋吉兵衛	留帳：天明9（1789）	絵図：今町

注：資料の略称・出典は次の通り。留帳：『三国湊御用留帳』。大門：『大門町記録』。松ケ下：『松ケ下萬代不易録』。問丸：『三国湊問丸日記』。問丸補遺：『三国湊問丸日記補遺』。絵図：「川端通絵図」（文久元年（1861）作成、みくに龍翔館蔵）。留帳、問丸は福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編（1959）所収。大門、松ケ下、問丸補遺は三国町史編纂委員会編（1973）所収。

まり上薬師町も清円寺町から拡大した町ではなく，喜宝町側から金津街道沿いに形成された町であると考えられる。このように金津街道沿いでは，清円寺町は隣接する中世由来の都市空間が拡大して形成された可能性が高いが，上薬師町から平野口町は範囲γからの都市空間の拡大によって形成されたと言えよう。

それでは川沿いの新町および砂丘・台地上の上新町はどのような機能を担っていたのだろうか。表 3 に示した商人は，近世資料によって三国湊を出入りする廻船との取引に関わっていたことが確認でき，なおかつ屋敷地が所在した町も特定できる者である。この表から読み取れるのは資料の残存状況により 18 世紀以降の様子に限られるが，海運に関わる商人は今町から松ケ下町にかけての川沿いの町に多く居住していた傾向が見える。また明治初期のものではあるが，三国町教育委員会（1983）が三国湊における職業分布を明らかにしている。これによると上町から木場町にかけての川沿いの町が主な商業地だったことが窺えるが，特に「船荷扱」は元新町から木場町にかけての商業地に集中していたことが示されている。さらに明治初期には上新町の各町に日用生活品を扱う小売商人や職人が居住していたことが分かるが，特に範囲γ周辺の久宝寺町や喜宝町，平野町には「遊女屋」や「料理屋」，「旅籠屋」が多く分布していた。また安永・寛政図では牛頭天王社（△3）と法円寺（□19）の間には「芝居小屋」の存在も確認できる。このように近世後半には，元新町から木場町にかけての新町は他国廻船との取引を担う商業地として発達し，上新町の範囲γでは元新町から木場町にかけての港に訪れる商人や水主などを相手にした商業が発達していたと考えられる。

表 3 の商人の中でも内田家は 18 世紀前半には三国湊を代表する豪商だったことが知られており（福井市立郷土歴史博物館編 2006: 44），元新町に大規模な屋敷地βを所有していた。『内田家記録』（三国町史編纂委員会編 1970: 9-10）によると内田家は元は福井城下町の商人だった

が，元禄16年（1703）に三国湊に出店してきたとされる。また内田家の成長と同時期の享保2年（1717）には今町が形成され，その後今町には表3のように海運関連の商人が多く居住した。従って元新町から木場町にかけての川沿いの新町は，正保2年（1645）から徐々に海運関連の商人の屋敷地が増加し，17世紀末から18世紀前半には日本海海運と関わる商業地として発達していたと考えられる。さらに18世紀前半における内田家の台頭に加えて，元禄5年（1692）に元町の森田家の衰退が始まったことを踏まえると，18世紀前半には元新町から木場町にかけての港の商業機能は，大門町周辺の中世由来の港を凌ぐようになっていたと考えられる。上新町において範囲γの都市空間が元禄2年（1689）以降に拡大し金津街道沿いの上薬師町にまで達していたということも，17世紀末以降には範囲γに隣接する元新町から木場町の港の方が大門町周辺の港よりも栄えていたことを示唆しているのかもしれない。

元新町の形成に先行して，福井藩は正保元年（1644）に川口留番所を「三国町端」から三国湊と滝谷村の境に移転させていた[21]。この川口留番所とは福井藩が津留を取り締まっていた番所であり，安永・寛政図においても図4の⑥の位置に確認できる。また福井藩が港における輸出入の大綱を定めた「沖ノ口法度」[22]では，川口留番所よりも下流においてあらゆる船の着岸や積荷の取引が禁じられていた。つまり川口留番所での検問は福井藩領のものだけでなく，幕府領や丸岡藩領などの他領のものも対象となっており，他国からの商品はすべて三国湊に陸揚げされることになっていたのである。三国湊の下流に隣接する滝谷村は丸岡藩領の外港となっていたが，着船や荷揚が三国湊に限定されたことによって港として機能できなくなり，三国湊との間で何度も争論を起こしていた（三国町史編纂委員会編 1983: 248-253）。「沖ノ口法度」は寛永3年（1626）に発布され，それ以降に多少の変更もあったとされる（三国町史編纂委員会編 1983: 227）。しかし正保元年（1644）に丸岡藩が滝谷村に着船できなくなったことに関して福井藩に対して抗議していたことが確認できるため（福井県編 1994b: 163-164），川口留番所の移転と合わせて三国湊に港を限定させる内容が加えられていたと考えられる。つまり福井藩は川口留番所（⑥）の配置と「沖ノ口法度」の内容の整備によって，他藩の港も立地する九頭竜川河口において福井藩領である三国湊に廻船を集めようとしていたと考えられる。

川口留番所が移転した正保元年（1644）は元新町の形成の前年であるため，移転前の番所は近世初期の「三国町端」にあたる松ケ下町にあったのだろう。元新町形成の直前に川口留番所が都市空間の縁辺から離れて⑥に移転したということは，新町の形成は川口留番所の移転と連動していた可能性が高い。つまり福井藩は，九頭竜川河口に出入りする廻船を政策的に三国湊に集中させており，それに対応した港と都市空間として元新町から木場町にかけての新町を建設し，さらには上新町の開発も行っていたのではないだろうか。既述のように17世紀には竹田川と九頭竜川の合流点で砂の堆積が進んでおり，中世由来の港町ではその影響を大きく受けていた推定される。福井藩が中世由来の港町をそのまま使用するのではなく，下流に隣接する新町を建設した背景には，港に関わる地形の変化も影響していたのだろう。

Ⅳ　港と都市空間の変化にみる福井藩の港湾整備

本稿の考察によって明らかになった三国湊の景観変化をまとめておこう。九頭竜川河口に位置する三国湊は，中世から竹田川舟運と九頭竜川舟運，日本海海運の結節点であったため，竹田川と九頭竜川の合流点に面する大門町と岩崎町が都市空間形成の起点となっていた。そしてこの都市空間の広がりは，背後に台地が面する比較的安定した地形の川沿いに展開していた。このような中世の都市空間が近世に大きく変化した背景には，17 世紀における港の変化があった。近世になると竹田川と九頭竜川の合流範囲が砂の堆積によって下流に移行しており，それに伴って中世由来の港は両河川舟運と日本海海運の結節点としての機能を低下させていた。福井藩による港と都市空間の整備はこうした地形の変化に対応したものだった。福井藩は，衰退していた中世由来の港に御蔵所を配置して竹田川舟運による年貢米輸送の拠点として整備し，また下流部においては不安定な地形条件で未開発だった川沿いの土地に新町を建設し，そこに廻船を集中させる振興策をとっていた。このような福井藩の整備によって，下流部の新町は主に廻船取引に関わる商業地として発達し，それに応じて砂丘・台地にも新たな都市空間が段階的に拡大されていた。一方で，中世由来の都市空間は地形の変化や下流部の新町の発達によって相対的にその商業機能を低下させていたと言えるが，御蔵所の運営・管理などの幕藩権力に関わる業務が住人に委託されることで町場として維持されていたと考えられる。このように福井藩は，旧来の港の整備と都市空間の拡張を行うことで，三国湊の水際線全体における港湾機能を再編し，港町の維持・発達を図っていたと考えられる。

また，近世において港としての条件が悪化していたにも関わらず，中世から存在していた三国湊を福井藩が維持・発達させていた背景には，広い後背地を持つ大河川の河口という三国湊の立地の特徴があったと考えられる。広大な後背地を持つ九頭竜川河口には中世から複数の有力な港町が存在しており，福井藩はその一つである三国湊を利用して御蔵所を運営することで，年貢米の積出を円滑に行っていたと考えられる。しかし福井藩が御蔵所を設置したのは地形条件が悪化していた上流部であり，下流部には新たな都市空間を拡張させていた。つまり福井藩の港湾整備は年貢米輸送よりも廻船との商品取引機能を優先させたものだったことが窺える。幕藩権力による領地構成の再編成が進んだ近世初期には，三国湊の広大な後背地において複数の藩領や幕府領が分立しており，それに伴って九頭竜川河口部では，福井藩領三国湊と丸岡藩領滝谷村の間で廻船の着船や荷揚げを巡って争論が生じていたように，藩領が分かれた港町の間で競争が激しくなっていたと考えられる。このような状況の下で，福井藩は三国湊を単に年貢米輸送の拠点として整備するだけではなく，他国廻船と越前国の諸藩領および幕府領を結びつける流通の結節点として育成する必要があったのではないだろうか。しかし三国湊の下流側には丸岡藩領滝谷村が立地しており，福井藩が三国湊の港を下流側に拡張できる余地は限られていた。そのため福井藩は，下流部には廻船取引に対応した新たな港と都市空間の建設を優先し，年貢米輸送は地形条件が悪化していた中世由来の港と町を維持して利用することで遂行し

ていたと考えられる。

以上のような三国湊の景観変化の考察によって，中近世移行期には幕藩権力による港湾と都市空間の整備を通して港町が大きく発達していたことが分かった。しかし本稿で明らかにした三国湊の景観変化は一つの事例研究の域を出ない。中近世移行期において発達する港町と幕藩権力の関係に迫るためには，他の港町についても景観復原研究を進め，比較考察を行うことが求められる。

（京都大学大学院人間・環境学研究科　院生）

【付記】本稿は2018年度に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文を加筆修正したものであり，骨子は2019年8月31日に開催された人文地理学会第156回歴史地理研究部会（於京都大学）において発表した。また，本稿の資料の利用にあたっては，福井県文書館，みくに龍翔館の方々には大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

【注】

1）正保郷帳は和泉（2008）所収。正保国絵図は福井県文書館蔵，「デジタルアーカイブ福井」https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-1001808-0（2022年12月27日最終閲覧）。

2）『町内治定改方記録』（三国町史編纂委員会編 1973: 328）。

3）以下，越前国の藩領，幕府領の歴史については，断りのない限り福井県編（1994: 9-212）による。なお結城氏が本拠とした福井の地は近世初期までは北庄と呼ばれていたが，本稿では福井として便宜上統一して表記する。

4）『三国鑑』と『町内治定改方記録』による。いずれも刊本は三国町史編纂委員会編（1973）所収。『三国鑑』は元治元年（1864）成立。『町内治定改方記録』は近代にいたるまでの町法を記録したものだが，冒頭に元禄12年（1699）の町や寺社などに関する記録がある。

5）福井県文書館蔵。刊本は福井県編（1990）所収。作成年代の推定は松原（1960）による。

6）「河口庄綿両目等事」大乗院文書。刊本は福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編（1965）所収。

7）刊本は福井県立歴史博物館編（2014）所収。

8）1：25000土地条件図「福井」（国土地理院発行 2004）。

9）刊本は福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編（1958）。

10）高橋好視家文書。福井県文書館において画像を閲覧した。

11）「坪江郷奉行引付」大乗院文書。刊本は福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編（1959: 330）。近世の「出来島」は，阿古江の後身とされる泥原新保村に居住していた道実家が，寛文9年（1669）の福井大火の際に材木の輸送に貢献したことで福井藩から拝領し，これによって名称も道実島となった（「道実家由緒書」（三国町史編纂委員会編 1975: 171-175））。

12）福井県編（1992）所収図による。

13）『三国鑑』（三国町史編纂委員会編 1973: 3）。

14）天正3年（1575）8月15日「織田信長朱印状」森田正治家文書1（福井県編（1984: 397）。

15）「御用諸式目」（福井県編 1982: 105-106）。

16）「世事覚之帳」久末重松文書（福井県編 1984: 364）。

17）「世事覚之帳」久末重松文書（福井県編 1984: 348）。

18）前掲注 10）。

19）「福井藩札所覚書」（福井市編 1990: 416-421）。

20）みくに龍翔館蔵。中町から木場町にかけての川に面した屋敷地割と住人の名前が記載されている。

21）『三国鑑』（三国町史編纂委員会編 1973: 2）。

22）寛政 7 年（1795）正月「三国湊沖口御法度条々」宮川五郎右衛門家文書（福井県編 1987: 949-952）。

【参考文献】

赤澤徳明 2015. 越前三国湊. 仁木宏・綿貫友子編『中世日本海の流通と港町』清文堂出版, 153-160.

阿部善雄 1967. 城米廻送よりみたる越前三国湊. 福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編『日本海海運史の研究』福井県郷土誌懇談会, 363-389.

和泉清司 2008.『近世前期郷村高と領主の基礎的研究』岩田書院.

笠松重雄 1971. 松平文庫越前国絵図（慶長絵図と仮称す）の研究（一）. 若越郷土研究 16(5), 81-105.

笠松重雄 1972a. 松平文庫越前国絵図（慶長絵図と仮称す）の研究（三）. 若狭郷土研究 17(2), 27-38.

笠松重雄 1972b. 松平文庫越前国絵図（慶長絵図と仮称す）の研究（四）. 若狭郷土研究 17(3), 57-63.

印牧邦雄 2014.『三国港町の名所旧跡と文化遺産』.

印牧信明 1998. 近世三国湊の成立と発展. 福井県立郷土歴史博物館研究紀要 6, 21-56.

杉原丈夫・松原信之編 1971. 『越前若狭地誌叢書上巻』松見文庫.

玉井哲雄 1984. 近世地方都市における町並の形成ー越前三国湊の町屋と都市構造ー. 建築史学 3, 60-92.

辻善之助編 1933. 『大乗院寺社雑事記 第七巻』三教書院.

福井県編 1921. 『福井県史』福井県.

福井県編 1982. 『福井県史 資料編 3 中・近世一』福井県.

福井県編 1984.『福井県史 資料編 4 中・近世二』福井県.

福井県編 1987.『福井県史 資料編 6 中・近世四』福井県.

福井県編 1990.『福井県史 資料編 16 上 絵図・地図』福井県.

福井県編 1992.『福井県史 資料編 16 下 条理復原図』福井県.

福井県編 1994a.『福井県史 通史編 2 中世』福井県.

福井県編 1994b.『福井県史 通史編 3 近世一』福井県.

福井県編 1996.『福井県史 通史編 4 近世二』福井県.

福井県立図書館 2004a.『県立図書館本 坂井郡神社明細帳』.

福井県立図書館 2004b.『国立史料館本 坂井郡寺院台帳』.

福井県立図書館 2012.『県立図書館本 坂井郡寺院明細帳』.

福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編 1958.『越前国名跡考』福井県郷土誌懇談会.

福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編 1959.『小浜・敦賀・三国湊史料』福井県郷土誌懇談会.

福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編 1965.『北国庄園史料』福井県郷土誌懇談会.

福井県立歴史博物館編 2014.『敦賀湊と三国湊』福井県立歴史博物館.

福井市立郷土歴史博物館編 2006.『福井藩と豪商』福井市立郷土歴史博物館.

福井市編 1990.『福井市史 資料編 5 （近世 3 藩と藩政 下）』福井市.

松原信之 1960. 越前国大絵図と近世村落の石高村名変遷に就いて. 若狭郷土研究 5(6), 77-83.

三国町教育委員会 1983.『三国町の民家と町並みー三国町民家調査・町並調査報告書』三国町教育委員会・

三国町郷土資料館.
三国町史編纂委員会編 1970.『三国町史料 内田家記録』三国町教育委員会.
三国町史編纂委員会編 1973.『三国町史料 町内記録』三国町教育委員会.
三国町史編纂委員会編 1975.『三国町史料 海運記録』三国町教育委員会.
三国町史編纂委員会編 1983.『修訂三国町史』国書刊行会.
宮本雅明 2005a. 日本海域港町の空間形成. 長谷川成一・千田嘉博編『日本海域歴史大系第四巻近世篇Ⅰ』清文堂出版, 313-345.
宮本雅明 2005b. 中世港町の都市空間とその近世化. 『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版, 174-204.
宮本雅明 2005c. 近世港町の都市空間. 『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版, 502-532.
宮本雅明 2006. 日本型港町の成立と交易. 歴史学研究会編『港町のトポグラフィ』青木書店, 79-110.
山村亜希 2005. 中世津島の景観とその変遷. 愛知県立大学文学部論集日本文化学科編 53, 1-28.
山村亜希 2008. 中近世移行期における都市景観と地形—駿河国江尻・清水を事例として—. 五味文彦・小野正敏編『中世都市研究 14 開発と災害』新人物往来社, 90-109.
山村亜希 2015. 室町・戦国期における港町の景観と微地形—北陸の港町を事例として—. 仁木　宏・綿貫友子編『中世日本海の流通と港町』清文堂, 255-286.
山村亜希 2018. 中近世移行期における地域構造の変化と港町の景観—出羽酒田を事例として—. 金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館, 130-150.